

照間 (ティルマ)

照間は、勝連半島基部の北側海岸に位置し、金武湾に面する。西側の一部は具志川に属し「具志川照間」と通称されている。

『おもしろさうし』に

かつれんの いちやくち

又 きむたかの かなやくち

又 かみからは てるまはま

又 下からははまかわに

(勝連の港、肝高の港、西は照間浜、南は浜川の港から)と謡われ、照間は古くから勝連城の港の役割をになっていた。

※「肝高」は、勝連の美称、「いちやくち」かなやくち」は港を意味する。

しかし当時は、十数軒の集落だったという。集落が発展したのは特に明治の中ごろ、田舎下りした士族が屋敷を形成しはじめてからである。

屋敷を形成したのは、主に首里系の士族で、元祖に王子、按司、親方をもつ門中もある。そのせいで照間の人たちは気ぐらいが高

く、士族としての誇りを長く持ち続け「断髪令」が出てもカタカシラを切らなかつたので、周囲から照間カンブーと呼ばれ、半分は揶揄、半分は羨望の目でみられていた。終戦後までそのカンブーをしていた人が女と間違えられてアメリカに声をかけられたというエピソードが残っている。

屋敷時代は、与那城西原に属していたが、次第に人口が増加し、一時は本字西原をしのぐほどになった。1947(昭和22)年に西原から分離独立した。

照間の意味

照間は、具志川方面から見れば太陽の昇る東の方向にあつて、その光が輝く場所「照るところ」と解釈することもできるが、先述の『おもしろさうし』から考えると、勝連城から眺めた風景から呼ばれたようにも受け取れる。すなわち勝連城から金武湾、「てるまはま」を望むと波がキラキラと輝く様子から「てるま」(照り輝くところ)と名称されたのではないか。勝連城から照間方面を眺めると、そのことが実感される。

県内の照(テル)の付く地名としては、糸満市の照屋、南風原町の照屋、沖縄市の照屋、またかつ

で中城村にあったという照屋などがその意味を解くヒントになるかもしれない。

照間のビーグとティラマー

照間といえば「ビーグ」の生産地として県内に知られているが、戦前から戦後しばらくはほとんどの家庭がビーグと関わる仕事をし、農家の経済を支えていた。『与那城村史』によれば、戦後一時期、照間には94台もの製筴機(せいえんき)があつて、年間2〜3万枚の筴表を生産していたという。ビーグは筴表、花筴(はなせり)、壁材、夏用の枕などに活用されているが、現在その栽培面積は激減し、かつて浜風にゆれるビーグの風景は見られなくなっている(残っているところでは子どもたちの体験学習の場としても活用されている)。

ビーグは和名でイグサ(蘭草)のことで、その種類は広く世界に分布し、220種類もあるという。わが国では備後(岡山県)が産地として全国的に知られていたもので、「ピング」から「ビーグ」と呼ばれるようになったと考えられる。

ビーグの葉草としての効用については古くから伝承されているが、その効用がさらに研究実証されれば、新たな産業として、照間の田園に再びイグサの波がゆれること

も期待される。ビーグとならんで照間の産物として戦後の一時期に知られていたのが「照間(ティラマー)」と呼ばれるサツマイモである。現在は栽培されていないようだが、地元では「ナークカ小芋」と呼んでいた。ナークカ小は屋号という。

『沖縄タイムス事典』によれば、終戦直後、照間の漁民によって本島に持ち込まれたといわれるが、どこから持ち込まれたのか、輸入先など詳細は不明である。急速に県内に普及し、1962(昭和37年)には作付面積の30・7%を占める主要品種になっていた。

最近の照間

照間は、半島の裏側にあつて交通が不便だったが、近年、海浜沿いに具志川から海中道路につなが道路、そして泡瀬方面から川田、照間とを結ぶ半島基部を貫通する道路が開通し、交通の不便さは解消され、沿道にはレストランや売店が建つようになった。特に夏ともなると、周辺離島を行き交う車の量も多くなっている。また海のレジャースポーツ「ウインドサーフィン」を楽しむ若者たちが白波をけたてながら、帆の色も鮮やかに滑走する光景は、沿道を行き交う人びとの心を和ませている。